

A. 教育課程の研究

原田 秀雄 高須 照夫 高橋 恵亮
杉山 光男 倉田 有邦 原 幸宏

昭和57年度高校入学者の学力とその変化

原田 秀雄

教育課程の編成に当っては、まづ生徒の学力の実態を把握し、それに対応した課程の編成をしなければならない。近年高校進学率が高まり、90%を越し、それに伴って学力の多層化に対応した高校教育がなされなければならないことは言うまでもない。本校においても例外ではなく、小規模学校であるにも拘らず、入学者の選抜方法とも関連し、学力の面からみて相当幅広い生徒を抱え、学習指導に苦労しているのが現状である。そこで、そうした生徒の学力の実態を把握し、それに対応した教育課程を編成するための努力がなされているのであるが、その一環として昨年度の高校入学者全員について、その学力の実態を国・数・英三教科の学習成績によって、集団として、また個人別にどのように変化してゆくかを一年間にわたって追跡してみた。

1. 高校入学者の学力からみた集団構成とその変化

図1は国語・数学・英語の三教科について、そのテスト成績を偏差値に換算して、中学三年後期、入試テスト、一学期末テスト、二学期末テスト、三学期末テストと1年間追跡したものである。この図のA B群とあるのは外部中学校からの入学者、C D群は附属中学校からの入学者という二群に分けてある。それは外部中学からの入学者は国・数・英三教科の学力テストと内申との総合点によって上位から選抜されたものであるのに対し、附属中学校からの入学者については、中学校への入学者選抜が無作為抽選によるものであり、学力幅が相当広いにも拘らず、6ヶ年の継続研究対象として大部分が連絡入学という形で進学している。したがってこの両者は学力面からみると明らかに異質集団であり、その二つの異質集団が一年間という時間の経過とともに単一集団化してゆく過程がこの図によって明らかである。そこで中学校三年の学力をベースにしてその変動をみたのであるが、それをどうやって把握したかということ、高校進学のための実力テストとして各学校で受験させる業者テストを全員が受験しているので、その3回のテストの平均値によったもので、相当正確に把握したつもりである。図1の5つのグラフをどのようにみるかということであるが、それはこの図だけから簡単に結論づけることはできない。教育課

程の研究グループとしては、次のように問題点をあげるにとどめた。

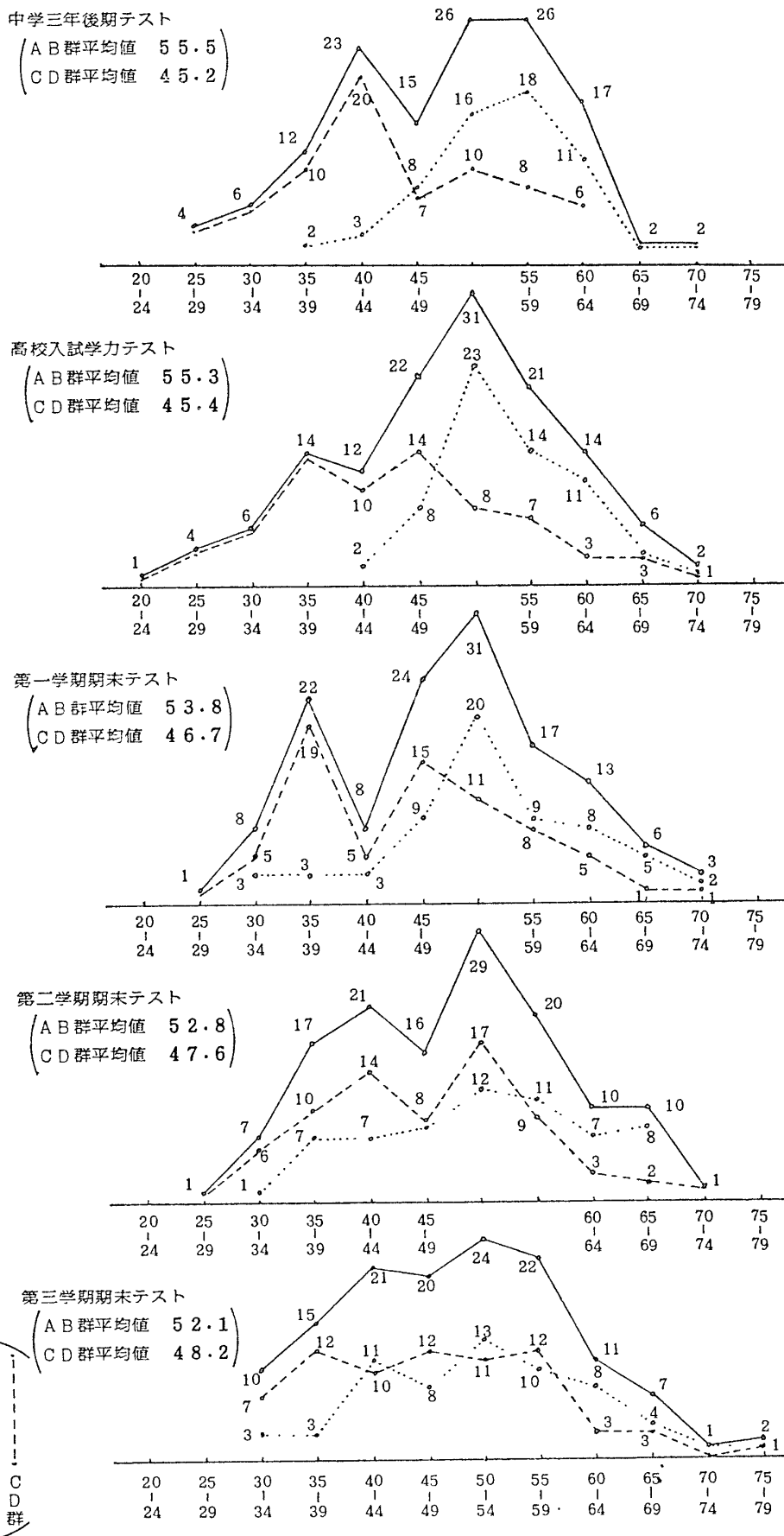
この幅広い学力差のある集団で学級を編成し、学習指導が本当に効果的に行われているのだろうか。こうした集団への指導は非能率的であり、能率をあげるための手段・方法として一体何が考えられるかという教育課程、学習指導面への問題提起であった。地域社会の高校をみると、こうした幅広い集団が受験の段階で学力によって、いくつかの格差のある学校に分散され、更に習熟度別という能力別学級に細分されているのが現状である。本校のように3学級の小規模学校が等質学級編成で学習指導を行うためには、相当の困難が予想される。すなわち、授業の焦点をどこに置けばよいか、上位集団を伸ばし、下位集団を引き上げてゆくような学習指導が行われるために授業は勿論、課外での個別指導はどのように行ったらよいか。更にこうした問題を少しでも解決するためにどのような手段が考えられるかということであるが、これについても単純に手のつけられるものでなく、エリート校化しないという附属学校に与えられた命題であろう。

2. 高校入学者の学力の個人的変化

そこで学力の変化を個人別に把握する方法として、個人のテストの成績の合計点によって相対順位をつけ、その変化をみることにした。学力の変化を相対順位の変化でみることに問題はあっても知れないが、可能な方法としてこれによることにした。それが表1であるが、3クラスで±20位くらいの変化、クラスで5・6位の変化は有意差があるとは言えないということで、成績すなわち学力の向上したもの、変化のないもの、下降したものという三段階に分けてみた。A群は外部中学から入学した男子、B群は外部中学から入学した女子、C群は附属中学から入学した男子、D群は附属中学から入学した女子である。これをみると一度大幅に下降すると、もともにもどすのに相当の苦労があるであろうということ。一年間の学力の向上という面を群別にみると、附属中学からの男子群、附属中学からの女子群、外部中学からの男子群、外部中学からの女子群という順になる。逆に一年間の学力の下降という

昭和57年度高校入学者の学力とその変化

図1



昭和五十七年度
 国語・数学・英語
 高校入学者の学習成績の追跡
 三教科のテスト成績合計点の偏差値分布

表 1

中三 ～ 一学期末

	A 群		B 群		C 群		D 群	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
80 ~ 99			1	3.0				
60 ~ 79					2	5.4		
40 ~ 59	2	6.9	2	6.1	1	2.7	3	8.8
20 ~ 39	4	13.8	5	15.2	9	24.3	3	8.8
0 ~ 19	5	17.2	6	18.2	10	27.0	16	47.1
- 1 ~ - 19	7	24.1	8	24.2	6	16.2	10	29.4
- 20 ~ - 39	4	13.8	5	15.2	6	16.2	2	5.9
- 40 ~ - 59	6	20.7	4	12.6	1	2.7		
- 60 ~ - 79	1	3.5	1	3.0	2	5.4		
- 80 ~ - 99			1	3.0				

一学期末～二学期末

	A 群		B 群		C 群		D 群	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
80 ~ 99								
60 ~ 79								
40 ~ 59			1	3.1	2	5.4	2	5.9
20 ~ 39	4	13.8	5	15.6	6	16.2	5	14.7
0 ~ 19	6	31.0	10	31.3	15	40.5	13	38.2
- 1 ~ - 19	10	34.5	12	37.5	10	27.0	12	35.3
- 20 ~ - 39	3	10.3	2	6.3	3	8.1	2	5.9
- 40 ~ - 59			2	6.3	1	2.7		
- 60 ~ - 79	3	10.3						
- 80 ~ - 99								

二学期末～三学期末

	A 群		B 群		C 群		D 群	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
80 ~ 99								
60 ~ 79								
40 ~ 59	2	6.9			2	5.4		
20 ~ 39	7	24.1			7	18.9	5	14.7
0 ~ 19	8	27.6	9	27.3	15	40.5	11	32.4
- 1 ~ - 19	8	27.6	16	48.5	10	27.0	12	35.3
- 20 ~ - 39	1	3.5	7	21.2	3	8.1	5	14.7
- 40 ~ - 59	2	6.9	1	3.0				
- 60 ~ - 79								
- 80 ~ - 99	1	3.5					1	2.9

中三 ～ 三学期末

	A 群		B 群		C 群		D 群	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
80 ~ 99							1	2.9
60 ~ 79			1	3.0	5	13.5	2	5.9
40 ~ 59	1	3.5	2	6.1	3	8.1		
20 ~ 39	7	24.1	4	12.1	7	18.9	7	20.6
0 ~ 19	1	3.5	6	18.2	8	21.6	11	32.4
- 1 ~ - 19	5	17.2	6	18.2	6	16.2	9	26.5
- 20 ~ - 39	7	24.1	6	18.2	7	18.9	2	5.9
- 40 ~ - 59	4	13.8	2	6.1			1	2.9
- 60 ~ - 79	4	13.8	5	15.2	1	2.7	1	2.9
- 80 ~ - 99								
- 100 ~ - 119			1	3.0				

昭和五十七年度 国語・数学・英語 三教科のテスト成績合計点による相対順位の変動
 高等学校入学者の学習成績の追跡

表 2

昭和57年度高校入学者の学力とその変化

1. この一年間、あなたの成績はどのように変化しましたか

	A 群		B 群		C 群		D 群	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
あがり傾向にあると思う	0	0	0	0	4	11.4	1	3.0
さがり傾向にあると思う	21	80.8	23	67.6	20	57.1	21	63.6
どちらともいえない	5	19.2	11	32.4	11	31.4	11	33.3

2. あなたの成績の変化に影響を及ぼした原因はなんだと思いますか

昭和五十七年度高校入学者の学習成績変動の原因を生徒はどう理由づけているか

	原 因	A群	B群	C群	D群	合計
成績向上の要因	高校生になって勉強しなければと思うようになった	2		8	4	14
	大学進学を身近かに感じるようになって勉強するようになった		1	4	4	9
	なんとなく勉強が面白くなってきた	1	1	3		5
	クラスみんなに刺激されて勉強するようになった			2	3	5
	部活動にうちこむようになって勉強にもうちこめるようになった			2	1	3
	部活動をやめてから勉強に集中できるようになった			1	1	2
	クラスの中に勉強の面での競争相手ができてがんばるようになった			2		2
	家族の私に対する期待を感じてから勉強するようになった			1	1	2
成績下降の要因	毎日の学校生活が楽しくて勉強に力が入るようになった				1	1
	勉強以外の遊びが楽しくて勉強に身が入らなくなった	11	9	20	11	51
	中学時代の受験勉強から解放されてなまけるようになった	12	17	10	6	45
	高校の勉強はむづかしく授業についてゆけなくなった	5	7	14	15	41
	毎日の学校生活があまり楽しくないので勉強する気にならない	5	5	9	7	26
	クラス全体のムードがなまけムードなので勉強にうちこめない	6	7	8	5	26
	家族の私に対する期待が重荷に感じられて勉強がうまくゆかない	2	3	8	5	18
	附属中学からの進学者がのんびりムードなので勉強できない	7	5	3	1	16
	部活動が楽しくて熱中しているのでつかれて勉強できない	2	3	4	2	11
	通学に時間がかかりそのうえ疲れて勉強できない	1	6	2	1	10
	附属高校が第一志望ではなかったので勉強する気になれない	1	2	2		5
	高校に入ってから健康を害したので勉強できない		2	2	1	5
異性の友達ができそのために勉強にうちこめない		1	2	1	4	
高校生になったら親が何も言わなくなったので勉強しなくなった	1	1		1	3	
一生懸命やっているつもりなのに成果があがらない				3	3	

面を群別にみると、外部中学からの男子群、外部中学からの女子群、附属中学からの男子群、附属中学からの女子群という順である。簡単に結論づけるならば、完全抽選で中学校へはいってきた附属中学の生徒が選抜で入学してきた外部中学からの入学者にひきづられて、学力が向上したといえるのではないだろうか。そこでその原因についてもう少しつっ込んで検討してみようということで、成績変化の原因についてのアンケート

を実施した。

3. 一年間の学習成績の変化の原因を生徒はどう理由づけているか

このアンケートの結果が表2で、成績向上の要因と成績下降の要因に分けてみた。この表をみると、やはり外部中学入学者と附属中学入学者との間に微妙な違いがみられる。そのことは附属中学からの入学者は、

学習環境(学校施設・通学方法・通学時間)等の変化、人間関係(先生・先輩・後輩)等の変化が全くないのに対し、外部中学からの入学者はこの点からだけでも附属中学入学者に対して大きなハンディキャップを背負っているということが根底にある。いずれにしても中学校から高校という一つの大きな変化に対し、適応・不適応という問題も関り合っただけで成績変化をもたらしたものだといえよう。ここで問題にされなければならないのは、そうした二つの異質集団を学級としてどうまとめゆくかという学級経営の問題であり、生徒個人については大幅な成績変動をした者に対してのケーススタディーの問題であろう。

4. 結 び

以上、学力の面からみると二つの異質集団が単一集

団化してゆく過程を追跡してみたのであるが、一方、学校生活の面からみると附属中学からの入学者はお互い同志が己に中学三年間の結びつきをもった、強固な集団であるのに対し、外部中学からの入学者はつながりをもたない、どちらかといえば附属中集団に対する対抗・防衛的な集団であり、この面からも、二つの集団の単一化という問題は生活面にも当然起り得ることであり、単に学力だけを切り離して考えるわけにはいかないが、少なくとも学力については、こうした学力面からの追跡が今後の本校の教育課程の編成に、また学習指導の一助となれば幸いである。